

「特集：東日本大震災とセキュリティ」に寄せて

林 紘一郎

2011年3月11日の東日本大震災（地震・津波・原発事故がほぼ同時に起きた、いわゆる3.11）は、不幸にして亡くなられた方々やご遺族、あるいは被災して避難を余儀なくされた方々などに、直接の被害を及ぼしただけでなく、被災地には関係ない人も含めて日本国民のすべてに、何らかの影響を与えた。それは、「水や食物の放射性濃度を気にしなければならぬ」といった日常の行動様式から、「そもそも科学は信頼できるのか」といった発想の原点まで、広範囲に及んでいる。

とりわけ科学に対する信頼が根本から揺らいだことは、われわれのように学問を職業にしている者にとっては、大きな反省材料である。事故との関連性が深い原子力や地震の研究者にとっては、これまでの業績や発想法が根本から揺すぶられ、過去の発言を検証されることにもなった。このような批判は、情報セキュリティの分野も例外ではあり得ない。否、情報セキュリティといった狭い分野にとどまらず、化学品や食品の安全をも含めた広義のセキュリティの分野こそ、その前提となるリスクに対する考え方を根本的に見直すことが求められている、と言わざるを得ない。

しかし「3.11」は、さらに広いインパクトを持つものだろう。電力等の重要インフラが麻痺したら経済全体が麻痺してしまう、サプライ・チェーンがグローバルになっているため部品の供給が滞れば世界規模で生産全体が止まってしまう、原子力発電という巨大システムの不具合は国家そのもののリスクに繋がる等々。効率第一主義で成長し安定しているかに見えた近代社会が、意外に脆弱なものであることが明らかになり、個人や組織がリスクに向き合う覚悟と仕組みが求められている。

こうした活動を下支えするセキュリティ分野は、何をなすべきだろうか？ これまでの「インシデントに対応する」という情報セキュリティに加えて、リスクを感知したり、低減・回避するためにも情報が不可欠だという観点から、「組織活動を支える情報の制御によって信頼を生み出す」といった、広義の情報セキュリティが必要になるだろう。そして、従来の「専門家を中心とした狭義のセキュリティ」から、「経営に役立つセキュリティ」へと変身しなければ、われわれの出番はないことを、肝に銘ずるべきだろう。

『情報セキュリティ総合科学』第3号を発行するに当たり、特集として「東日本大震災とセキュリティ」を組んだのは、このような問題意識からであった。このオンライン・ジャーナルは、辻井前学長が唱えた「情報セキュリティの総合科学化」を目指している。3.11を機会に総合力を見せつけなければ、これまた存在意義がないと考えて提案したところ、客員研究員を含めて6名の執筆者による8編の論稿を揃えることができた。なおここで「情

報セキュリティ」とせず、「セキュリティ」一般を含めることとしたのは、上記のような問題意識を反映したものである。

3.11 をめぐっては、新聞、雑誌、テレビ、オンライン・ジャーナルなどで多くの特集が組まれている。しかし、セキュリティに特化したものは意外に少ない。この特集が、広義のセキュリティのすべてを網羅しているわけでもないし、短期間に仕上げたため補強したり（場合によっては）修正したりする必要が出てくることは避けられない。しかし私自身も執筆陣に加わった経験からいえば、「今、この時点で、利用できる素材を使って、最大限の努力をした」ということだけは断言できる。この号が世に知られるに連れて、「震災とセキュリティのことなら、このサイトを見よ」という評判が、深く静かに浸透することに期待している。

なお、集まった論稿のかなりの部分は、8月に急逝された故板倉征男名誉教授が受け持っていた「セキュリティ管理と経営」というテーマに、何らかの形で関係している。板倉さんと私は、ほぼ同時期に NTT グループに在籍し、当大学院の設立と同時に同僚となった、ほぼ 50 年に近い付き合いである。山登りを趣味（を超えたアート）とし、「引退したら山登りができる」と言っていた彼が、その山で最期を迎えることになったのは、運命というほかない。

私としては、この特集が結果的に板倉さんの業績を引き継いだものになっており、本号が実質的な「追悼号」になっていることを祈っている。また、来年に向けて開講準備を進めつつある「ガバナンス概論」の、基礎となることを期待している。残された者にとっては、先人の業績を踏み台にして前進することこそ、学恩に報いる道である、と信じているからである。